

私

が生まれたのは、母が日本人、父がイタリア系アメリカ人という家庭。家の中には三つの文化が混在していました。日本で生まれた私は、その後キリスト教のドイツとアメリカ、回教のイラン、そしてまた日本とは形の違う仏教を信仰するタイという、ベースが異なる国々を移り住み、さまざまな経験をしてきました。

たとえば回教国でのこと。ラマダンという断食苦行の時期になると、回教徒の友人は昼食をとることができません。私はそれをかわいそうに思っていたのですが、彼女たちは言うのです。「私たちはかわいそうではない。これはとても大事な行事で、むしろ喜んで実行しているのだ」と。このような経験を通して、私はごく自然に多様性を受け入れるようになったのです。

さて現在この世界を見渡すと、政治、宗教、経済上の対立や戦争が勃発し、環境問題が深刻になっています。私たちは、どうしたら平和で住みやすい世界を創っていくのでしょうか。私たちの心の内にある、問題解決を妨げているもの

とは、何なのでしょう。

それは、「自分の国が一番」という意識かもしれない。またあるいは、「知っているつもり」でおこなわれる表面的な交流の姿勢ともいえそうです。しかし私たちは実際、隣人と交流する日々の中で、考え方や価値観の違いを感じとり、必要があれば、それらの違いや好き嫌いを越え、互いを理解するために歩み寄ります。外交における妥協点の拡大も原点は同じなのです。

一九七〇年に開催された先の大阪万博も、海外文化と交流できる大きな機会でした。しかし珍しさが先行し、真の国際交流にまでは至りませんでした。それから三五年を経て開催された二〇〇五年日本国際博覧会「愛・地球博」で、私は広報プロデューサーを務めています。今回参加した二二〇カ国のパビリオンは、「グローバル・ループ」とよばれる全長二・六キロの空中回廊でつながれています。各国は自国文化のエキスを各パビリオンで紹介し、一方、私たちはその一つひとつに対して、珍しさではなく尊敬の目

で接することができるようになりました。まさに今こそ、真の国際交流・文化外交のスタートといえます。今日、この日本に住んでいる私たちは、大事なターニング・ポイントに立っている。そんな気がしてならないのです。



イラストレーション：栗岡奈美恵

マリ クリスティーナ／異文化コミュニケーターとして、都市計画、教育問題、人権問題等について、さまざまな活動を展開。AWC（アジアの女性と子どもネットワーク）代表。国連人間居住計画親善大使。

# 真の文化外交をめぐって

● マリ クリスティーナ